

課題：ダイヴァーシティ

500M×500M の敷地があると想定しよう。小樽カントリー倶楽部の東にちょうどそのスケールの空地が見出せる。ここに2万人が住みかつ活動し生産し交流する立体的な街をつくるのが今回の課題である。

かつて原広司は 500M×500M×500M キューブの立体都市を構想したが、そのことを脳裏に浮かべてみてもよい。ただし、今回はプラトン立体にこだわるわけではない。ともあれ2万人というスケールの人々が暮らす街を構想してほしい。

このときひとつ重要なのが、多様性である。つまり60年代から70年代にかけて日本で続々とつくられたニュータウンのように、同年代のサラリーマンを中心とする同質の人々が住む街ではない、ということだ。そうした街はいま、居住者の高齢化と空き家問題に悩んでいる。単一機能の街であったからだ。ただ居住するだけ。経済活動といえば消費活動のみ。豊かな交流にも学びにも生産にも情報発信にも欠け、外に働きに出て帰ってくる賃金労働者の居住地であったからだ。

コロナ禍は困難な時期であったが、近現代のさまざまな問題を明るみに出してもした。交通機関を使って毎日働きに出て休日も定まった生活の器としてのニュータウンは、水曜と土曜の夜に排水管が詰まるという笑えない話もあったほど、画一的な生活を送る人々が居住する労働力再生産の畑であった。そうした画一的な生活や労働の形態が変わっていく兆しが見えてきた。それがコロナ禍によって加速された時代の動きだ。

将来にわたって空き家問題を出さない（つまり異なる世代や職種の人々が混在する）、充実した生活の時間を送ることができる、あるいは何もしない時間を味わうこともできる（眺望を楽しみ、天体の運行を愛で、緑や水や虫の音や蛍の光を内包する）、そうしたダイヴァーシティに満ちた一つの連結された都市空間を構想してほしい。連結された、であるとか、立体的である、というのは、建物の一つ一つが土地に縛られ、まるでマッチ箱をならべたように展開する、ニュータウン的景観を脱した、制度にとらわれない新しい風景を生み出してほしいからだ。

このダイヴァーシティにこめられる機能も自由に想定してよい。人間が生き生きと生きるためにはどのような機能が必要であるのか。あるいは機能で測ることのできない機能を超えた機能が要請されるのか。

近代都市計画理論は、都市を四つの機能に分けた。働く場所、住まう場所、憩う場所、そしてそれらを結ぶ交通空間、の四つである。それは工場労働者を想定した思想であった。用途地域制度はそのような機能分離の思想に根ざしている。各々の生活環境を守るという題目のもとに、ただただだだっ広く広がる均質な居住空間ができていった。

もの／人／情報の伝達技術の進歩、すなわち輸送手段と通信手段の発展によって、私たちはいまや新しい「都市」空間に居住している。この「都市」は物理的な広がりのみにおいて捉えられるものではない。そして逆に、茫漠とした物理的の広がりに向かうのではなく、むしろあるスケールを持ったコンパクトな空間に、さまざまな多様性をこめた居住形態を生み出すことができる時代が訪れつつある。既存の制度（たとえば建築基準法のような）にとらわれた不毛な空間をこれ以上蔓延らせるのは一旦中止しよう。人口増加という量の思想から人生の喜びと驚きという質の思想へと転じていこう。

ル・コルビュジエのユニテダビタシオンは、空中に持ち上げられた一つの立体的な都市であった。ショップを内包し、屋上には幼稚園も広場もあった。ただ、残念ながらスケールが足りなかった。いま、ショップはホテルやレストランへとコンヴァージョンされ、幼稚園は集会場となっている。

その点、2万人は実は単位マーケットとしても十分な数だ。半径1km に2万人がいればコンビニも「ツタヤ」も成立するという。幼稚園や学校も成立する。メディアなど情報発信の施設も成立するだろう（1991年に竣工した東京青山の TERRAZZA は Abema TV のスタジオへとコンヴァージョンされている）。

景観論的な視点からも興味深いプロジェクトとなることだろう。たとえばピラミッドは砂漠からの、日本の巨大古墳は大阪湾からの、景観的なフォーカルポイントであった。このダイヴァーシティはおそらく新たな北海道へのゲートともなることだろう。

思考のレッスンとして、一辺 500M に2万人が居住する立体的な多様性の街ダイヴァーシティを提案してほしい。

参考文献／

- ・未完結なものが不連続に連続すること、あるいは異質の事物の共存について：レム・コールハース『錯乱のニューヨーク』筑摩書房、竹山聖『空間加工のイメージ：竹山聖のスケッチと言葉』22世紀アート
- ・多様であることの尊重、あるいは建築の喜びと驚きについて：竹山聖『庭／のびやかな建築の思考』A+F BOOKS、竹山聖『京大建築 学びの革命』集英社インターナショナル



対象： 北海道科学大学建築学科学部、大学院学生（4年意匠系ゼミ学生は必修建築ラボセミナー）、学外建築学生有志

提出物： 構想の表現に必要なと考える図面、模型写真、透視図、図式、言葉をA1一枚にレイアウトした図面 PDF データ

提出要領詳細： 後日、応募登録者に連絡

課題講評審査日程： 2023年9月8日（金）13時より（詳細決定次第登録者に通知）

作品講評審査： 竹山聖 北海道科学大学客員教授、京都大学名誉教授
鈴木隆之 北海道科学大学客員教授、武漢大学都市建築学科教授

オブザーバー： 川人洋志、岩澤浩一（北海道科学大学工学部建築学科教員）

応募登録及び作品提出日程： 応募登録 2023年6月30日午後5時締め切り、
作品提出日時：2022年9月6日12時

応募登録： 下記 Google Form 様式に必要な事項を入力。
<https://forms.gle/o51pXHts15LXqzDB7>

講評審査会場： 本学製図室

顕彰： 顕彰作品数、顕彰賞品についての詳細は、後日、応募登録者に連絡

問合せ： 川人（E-Mail:kawahito@hus.ac.jp）